

## 企画3 人の移動と国際文化 コメント

コメンテーター 山脇千賀子

Chikako YAMAWAKI

●文教大学国際学部准教授

(地域研究 [ラテンアメリカ]、社会学)

本シンポジウムでは、中国・朝鮮族／フィリピン人／ウチナンチュ（沖縄人）の移動が取り上げられた。これらの人々は、アジアにおいて一般に可動性の高い人々と理解されており、そうした人々のあり方を検討することによって、定住者には見えない「何か」が浮かび上がる印象をもった。

その「何か」について十分に議論するだけの紙幅はないが、ここでの議論において重要なポイントは、移動することによって人々が文化のダイナミズムの現場に立ち会う経験をしているということである。通常、文化は一定の時間をかけて変化するものと考えられており、民族があるひとまとまりの集団として想定される背景には、民族が共有する文化は簡単には変化しないという前提がある。しかし、現実には文化は想定されているよりもずっとダイナミックな変化を繰り返しながら継承されている。そのことに気づく機会が移動によってもたらされるのである。

多くのナショナリスティックな議論においては、移動した民族・国民が「故郷」を離れても民族・国民としての意識をもち、そうした人々の中での絆・つながりが大きな役割を果たすものとされている。これは多分に移動しなかった定住者の視点からの解釈である。これを移動する人の論理から考えるなら、実のところ、生き延びるために重要な絆やネットワークを、ナショナルなつながりだけに限定することは不合理なことであり、活用できる資源は多いほうがよいと考えるのが当たり前のことであろう。そのために、ナショナルなつながりのなかにも多様な性格をもつメンバーを含みこむことになる。つまり、多文化が混ざり合った雑種的な性質を獲得しながら、人々は生きていくことになる。

もともと、それは必ずしも移動する人々にだけ起こっていることではなく、定住している人々にも経験されている。しかし、定住していることによって、そうした事実への気づきを獲得しにくい条件のもとで生活が営まれる。そして、定住者からみて他者である移動する人々を異種として認識することになる。それは、排除や差別を引き起こすことも少なくない。このように、定住者にとっては、ナショナルなつながりは異種である他者との分断を促す機能を持っているのに対し、移動者にとっては、多様な他者との架橋がナショナルなつながりによって促されることも少なくない。

以上のような事情により、可動性が高い人々であるということは、人々の多様なつながりに開かれた存在であることを意味する。移動する人々は、多様な資源を包む込むハイブリッドな存在と言ってもよいだろう。ただし、それが当事者に自覚されているかどうかは分からない。無自覚かもしれないが、意識されないレベルにおける人間のあり方を方向付ける根拠として、ハイブリッドが当たり前であるという感覚は作動するだろう。

同時に、本シンポジウムで取り上げられた可動性の高い人々の背景として、コロニアルな歴史が存在していることは見逃すことができないだろう。コロニアルな歴史をどのように捉えるのか、という重い問いがその背後にある。